ヤマダヒフミ詩集

色々な朝

何もかもが透明になる朝
僕は生きている
何もかもがガラスのように崩れていく朝
僕は生きている
どこかの国に原子爆弾が落ちた朝
僕は生きている
誰かがまだ愛し合っていて
恋人の髪をそっと撫でている朝
僕は生きている

川べりの散歩

雨が降る
夜の途中で
僕はいつも言葉の橋の真ん中で
立ち止まってしまうのだが・・・
世界はガラクタの集積
そう言える事で心がすっきりとする
今この瞬間、僕がいなくても
誰も困らない
という事はこの瞬間
世界がなくても僕は困らない
さて、朝が来る
僕は川べりに散歩に行こうか

電源

宇宙が
人差し指と親指の間の距離だとしても
誰も困らない
それでも人と人は

相変わらず憎しみ合い殺し合ったりもするだろう
そしてささやかな蝶のように穏やかに愛し合ったりもするだろう
さて僕はパソコンの電源を消して
何を考えれば良いのか
それすらも分からない

ベッドの中の全宇宙

「もの思う歯車」という
フレーズを考えた事がある
この世では何でも利用されるから
僕はいっそ壊れてやろうと思う
精神病院の奥底で
体がベッドに縛り付けられたままでも
心だけは自由なままだ
そこに全宇宙があるから

秘めたままで

何かを守るため
大切なものを守るため
そうやって全てを失った
優しさが人を殺し
優しさが惑星を殺す
それでも時に、優しくならねばならない
強さを内に秘めたまま

君の笑顔は

全てが忘れられ
全てが過ぎ去っていく
人々はその事を
時々忘れたような顔をするが
やっぱり全ては忘れられ
全ては過ぎ去っていく
それでも君の笑顔だけは
僕の心に残っている

青空の向こう

青空の向こうに
何があるのか
誰も知らない
学者も先生も
だけど僕は知っている
神様が笑っていて
こちらを穏やかに見ているのだ
時々、怒ったりもして

旅人の花びら

ローマの暴君ですら
穏やかな貴公子に見える
そんな時代を僕達は生きている
一片の何の利己心もない優しささえ
オアシスに感じるような
そんな時代を僕達は生きている
この砂漠で死ぬ時
せめて枯れたひとひらの花として死にたいものだ
あとで旅人がやってきて
それを愛でることができるように

詩作の時

何を考えることも
何も書くこともできない
そんな時に詩はやってくる
僕は寝床から身を起こして
それを薄汚れたノートに書き付ける
時間は深夜四時過ぎ
鳥もまだ眠っているというのに

とある曲に

その曲を聴いて
僕の魂は目覚めた
そしてそれは今も目覚めたまま
燃えさかったまま
明日を目指そうとしている

地球の裏側

理路整然とした殺人者には
何一つ驚かない
彼が東大の法学部を出ていたとしても
眉一つ動かす気はない
・・・だが、彼が
自然の神秘を理解したとなると
僕は自分の全生涯を放り出し
自分の人生を初めからやり直すだろう
そして地球の裏側を逆立ちして歩くだろう

一輪の花

みんなが批評家で
みんなが賢い
みんなが正しく
みんなが鋭い
春の風の中で
一輪の花が咲き誇っている
それは正しいのか間違っているのかなんて
意味がある事だろうか

神様の前座

このままじゃ駄目だ
このままじゃ上手くいかない
一体、人間の営みが
上手く行った試しがあるだろうか?
全て偉大な事というのは
よくできた失敗にすぎない
最後に神様がプンクトを打つ
そのための前座にすぎない

動物達の会議

風よ吹け
そして俺達のみすぼらしい魂を笑え
みすぼらしい事にみすぼらしい姿で
汲々としている俺達を
風よ吹け
そして俺達の腐った魂を凪いでくれ
世界はまもやく穏やかな風になり
人間などはひとりもいなくなる
その後、急にサイや象が喋り出し
彼らは最も理知的な世界統制方法について

再び思案しだすだろう

一輪の花

みんなが批評家で
みんなが賢い
みんなが正しく
みんなが鋭い
春の風の中で
一輪の花が咲き誇っている
それは正しいのか間違っているのかなんて
意味がある事だろうか

神様の前座

このままじゃ駄目だ
このままじゃ上手くいかない
一体、人間の営みが
上手く行った試しがあるだろうか?
全て偉大な事というのは
よくできた失敗にすぎない
最後に神様がプンクトを打つ
そのための前座にすぎない

動物達の会議

風よ吹け
そして俺達のみすぼらしい魂を笑え
みすぼらしい事にみすぼらしい姿で
汲々としている俺達を
風よ吹け
そして俺達の腐った魂を凪いでくれ
世界はまもやく穏やかな風になり
人間などはひとりもいなくなる
その後、急にサイや象が喋り出し
彼らは最も理知的な世界統制方法について

再び思案しだすだろう

世界を暗く

僕の心はこんなに暗いのに
世界はこんなに明るい
日曜日の中に穏やかな陽射しは落ちて
恋人達は仲むつまじそうに手をつなぎ
友人達は楽しそうに談笑している
そしてその裏側では
謀略が世界を支配している、と
考える人間が世界をこんなにも暗くする

詩人と政治家

詩人を信じたまえ
例えそれが嘘でも
音楽家を信じたまえ
例えそれが虚構でも
政治家を信じるなかれ
例えそれが現実でも

野良猫のおしっこ

幻想の希望に縋る人々は
やがてそれに幻滅し
そして絶望に至り
彼らは至る所で破壊を始める
自分のやることなすこと他人が悪いと
罵りながら
それを見て野良猫は
彼らを嘲るように
電柱におしっこをひっかけた

見つめる

この世界が滅びても
僕の世界はある
人間がいなくなっても
僕はいる
一本の枯れ木のように
一輪の花のように
そして君もそこにいて
僕を見つめている
何のためかも知らずに

自殺

生きる事は辛い事だから
時々死にたくなる
それで「死にたい」と言うと
「ネガティブだ」と言って怒られるから
益々死にたくなる
そうしてほんとに死んでしまったら
みんな忘れてくれる
そしたら天国で遊んでられる

詩の賞賛

一杯のコーヒーと一枚の白紙と一本のシャープペン
これが僕の全てだ
他には何もない
ここに僕は無限の宇宙を作る
それが詩人の仕事だからだ
人はそれを笑うけれど
時々、蝶々がペンに止まって
僕の詩を「いいよ」って
誉めてくれるよ

土の札束

札を数えて
何年も過ぎた
それを見てニンマリとしている内
何百年も過ぎた
そしてとうとう使う機会のなかった札束は
今ちょうど土に還った

冬のとある一日

僕の人生は
一本の折れた樹
それでもその折れた箇所から
新たな花が芽吹くかもしれない・・・
そうしてそれは嵐の抵抗に打ち勝って
この世に清々しく咲くのかもしれない
人間は負けて始めて
美しく咲き誇る事ができるのかもれない・・・
僕はそんな事を思いました
それは冬のとある一日でした

一人だけの友人

くだらない人間です
くだらない人生です
そう言うと
人はニヤッと笑って慰めてくれる
人は結局堕落したもの
自分より駄目なものを好み
そういったものを
「もう仕方ねえなあ」という表情であやすのが好きなのだ
僕はいつもそう思う
この五月なのに冬のような朝で
僕の友人は一杯のコーヒーだけ

暗い

ポジティブを
前向きを
人生に脅迫され
夜の道を
一人歩く

世界はどこでも
暗い
道という道が
こんなに照らされても　尚

孤独死

自殺したくはないが
自殺に追いつめる何かがある
健康を脅迫されると
不健康に至り、死にたくなる
その方がまだしも
精神にとって健康だからだ
僕はよく知っている
健康で幸せそうな人が
どんな悲哀の中、一人死ぬのかを

神の失敗

過去を透明に
未来を透明に
人類はやがて消滅する
それも電子レンジがチンとなる
その一瞬の間くらいには
すると神はさもさっぱりしたという顔をして
再び生き物を創造し出すだろう・・・
「あれは失敗作だった」と
愚痴など言いつつも

君の笑顔は

人間が消滅して
十年になる
ようやく蛙は蛙らしく川中を泳ぎ
おたまじゃくしだってあんなに元気だ
人間が消滅して
十年になる
全てのものはこんな生き生きとして
あんなに威張ってた連中を

つゆとも見返りはしない
・・・それでも君は　君の笑顔だけは
どこかに残っていると僕は思うのだ

青空を吸う

真面目な人達が一杯いて
息がつまるぜ
彼らは自分に真面目でないから
あんなに物事に真面目になるのだと
時々、思う
それを生活の中で言うと怒られるので
こうやって詩の中でこっそり吐き出すことにしている
やれやれ、肩が重く凝ってしまったよ
たまにはのびのびと何もない
青空を吸ってみたいもんだ

チップ

現実主義者というのが僕は大嫌いだ
彼らだって僕の事は嫌いだろう
それはそれでいい　互いに結構だ
だが色んな事を強制するのは止めて欲しい
そんなに滅びたければ
自分だけで滅びればいいのだ、と
僕はいつも思う
彼らは難しい顔をして
「それは現実とはそぐわない」などと言うが
・・・まあ、いいや　僕は僕の滅亡にチップを掛けて
この世界を変えてやろう

十二歳

病院に行って
検査をして貰った
どこにも悪い所はないと言う
それでも僕は死ぬのだと言う
いつか

その時、お医者さんはやっぱり
今と同じで少し微笑ってらっしゃるでしょうか・・・？
・・・そんな夢を見ました
夢の中で僕は十二歳でした

誇り

僕は
誇りを持って生きている
どうしようもない自分に
誇りを持って生きている
ゴミクズ以下でしかない自分に
誇りを持って生きている
人間の仲間に入れて貰えない自分に
誇りを持って生きている
誰からもみじめだと笑われて
足で踏みつけられてゴミ箱に捨てられた自分に
誇りを持って生きている
僕はそういう自分に
誇りを持って生きている

天使の終焉

春の足音
天に舞い
今、天使は
素足で降りてきて
僕の肩に乗る
天使のスカートの下から
天使の下着が見えて
僕はついつい欲情する
・・・いつのまにか、世界は終わっていたのだ
天使は僕の肩に触れて
僕を「終わり」に導いた

良いこと

心を刺にして
そんなにしないと生きることはできないの?・・・

幼稚園児は純真な瞳で
僕を見つめて、そう訴えかけてきます
まあ、僕にそれに答える術はないのですが
僕は代わりにその子の頭をゆっくりと撫で
行っておいでと彼女の草原に旅立たせてやります
そこでライオンに噛まれて死んでも
心を失うよりは良いことですから・・・

万事めでたし

幸せな人生に憧れて
今の今まで走ってきました
車
金
家庭
愛人
役職
名誉
・・・全て、全て手に入れてきました
それは私の努力の賜物です
・・・でも何故かむなしい
何故か死にたいのです
私はおかしいのでしょうか?
精神科のお医者さんはちょっと微笑って
「お薬出しときますね」と言ってニヤッと笑った
さて、これで無事解決
万事、めでたしだ

虫の生

日々の退屈
生きる退屈
・・・人類は死にたがっているのだ
ふと、そんな事を想う
窓の外では
秋の虫がうるさいくらいに鳴いている
彼らは死にたがってなどいない
むしろ、生きているのだ

恋人の言

この世界が壊れて

崩壊してしまえばいい、とよく思う
そんな考えはネガティブだと友人は言うが
その友人は寝ているとき、いかにも苦しそうな声を洩らすのだと
その恋人は言っていました

一羽のヒバリ

自由になりたいな
世界を突破して
ラグビーのようにDFを突破して
自由になりたいな
この青空のように
・・・でも、その青空には見えない線が引かれていて
それは人間によって国境とか境界線と呼ばれたりする
その間を一羽のヒバリは
悠々とくぐっていって天に達した

アイスコーヒーの飲み方

失う事を恐れて
全て失った
その人はやっぱり
「仕方なかったんだ」と言い訳してた
その人は来世も　やっぱり
「仕方なかった」と言い訳するだろう
来世なんてものがあれば、の話だが
さて、僕はアイスコーヒーを啜ろう
僕だけの飲み方があるのだ

キス

現実という牢獄に
詩という杖で
窓を開け
夜の空に
世界の果てに
僕は飛んで行く
思い起こす事なんてない
・・・いいや、あの日

君のほっぺに
キスしておけば良かったかな

奴隷の悦び

奴隷は
同じ奴隷を叱りつける時
一番悦びます
それ以外に
悦ぶ時はないから

電車の利用

電車には二つの利用方法がある
一つは乗って移動する事
もう一つは
そこに飛び込む事
後者の方は他人に多大な迷惑をかけますが
他人なんて糞くらえだと思う人は
よく利用するようです

笑え

笑え
笑えよ
君が嫌いだった奴が
今、死んだんだ
ほら、笑え
泣くなよ
心の奥底はほら、あんなに笑っているのに・・・
心が笑っている時は
顔も笑え
でないと
ひとりぼっちの心が寂しいだろうが

励まし

自殺したい時は
僕に教えて欲しい
ほら、さっさと死になよ
お前の事なんて誰にとってもどうでもいいんだ、と
力強く励ましてやるから
そしたら君は僕に反発して
明日から僕を見返すために
力強く生きようとするだろう

落ちる

落ちていく
深く、深く落ちていく
皆一緒に落ちていく
皆一緒だから怖くないと
うそぶきながら
落ちていく
どこまでも、どこまでも落ちていく
上がっていると思いこんだまま
この世の奈落の底へと・・・深く

独りぼっちの人

全部他人のせい
全部誰かのせいだから
僕のせいではない
僕は最高
これまでになかったぐらいに
最高の出来
人からも羨ましがられる
ほら・・・あの人も僕を見ている
でも、僕は何故か独り

独りぼっち

無言のドア

辛い辛いと騒いでたら
本当に辛くなっちゃった
苦しい苦しいと言ってたら
本当に苦しくなっちゃった
楽しい楽しいと騒いでたら
本当に楽しくなっちゃった
・・・それでも扉はあの樹の向こうで
じっと光を湛えて誰かを待っている
僕はそこに近付くために無言で・・・言葉の障壁で武装して
ドアを蹴破って、その中に入っていった

青空と語る

青空を見て
缶コーヒーでほっと一息つく
隣には足早に
怖い顔したサラリーマン達が
急いで、急いで
僕は急がずゆったりと
僕は無職なのです
何もないのです
それで、こうしてどうやら
青空とゆっくり語れるらしい

最初の友人

雨が降れば
家で寝ころび
晴れれば
外にお散歩
僕は一人
友達も恋人も家族も・・・ない

僕は天に一人で生まれ
一人で帰っていく
ただ、それだけのことなのだ
人はそれを憐れんでくれるが
僕は決して僕を
憐れみはしない
ほら、目の前には可愛らしい雀が一匹
虫をくわえて突っ立っている
そいつは僕を
決して憐れみはしない
だからそいつは僕の
初めての友人となった

呪い

言葉ここにあらず
心ここにあらず

　なにもなき浮き世なれど
　我が目には涙さえ浮かばず

言葉ここにあらず
心ここにあらず

　君はそこにいて
　己の微笑みを保ったまま
　天を呪った

スクラップ置き場

世界は一つの問いを出し
それに自ら答える
・・・僕達はその間に挟まれている機械
身動き取れぬ機械
それでも時々壊れて
自己主張してやるといい
するとまた別の部品に変えられるのだが　僕には
スクラップ置き場のが心地が良いのだ

回る

壊れた機械に
一羽のカラスが止まる
その機械こそは僕で
そのカラスは親友
世界は敵で
それでも地球は回っている

僕の言葉

愛することなく
愛撫することが
恋愛だと教えられた世代
そんな世代です、僕達は
世代の事なんか言いたくはないが
僕達は
決められた幸福を手に入れるために
燃え尽きる事を前提されて
大量生産された一本のロウソクです
僕は今、未来に向かって
自らの燃えさしを
世界に広げようとしている
この片言の
言葉達で

君が欲しい

青空は輪廻の如く、続き
俺の足取りは軽い
俺にはまだ世界は与えられてはいないのだが　それでも俺には
俺の魂があれば十分なのだ
人々が重く見る所を軽んじ
人々が軽く見る所を重んじ
そんな風にして生きてきた
ヒバリのように　春の風のように
一人で　愉しく
それでも俺は
君が欲しいのだ
時に優しく、楽しく
語り合える君のような相手を・・・

奇跡

この世界で会えた事を
幸福に思おう
今、俺が天に召されたといえ
この一瞬は、やはり
奇跡ではないか!
・・・君がそれを思わない限り
奇跡とはならないが

死

死を
怖れるなかれ
死は
友人だ
この与えられた生のなかで
何事かを為そうとする者には

幸福

幸福はいつも
あの道の向こう
それはいつも遠く
いつも僕達の手に届かない・・・

幸福はいつも
あの道の向こう
それでもこちら側には人がいて
それは幸せかもしれない

幸福はいつも
あの道の向こう
幸福はやってくるものではなくて
自分で作るものなんだ

真実の花

真実は
森の端に
そっと咲いている花のよう
人がそれを見まいとしても
やはりそれは美しく咲き誇っているから

心の焦り

心よ　心
なにをそんなに焦るのだ?
お前の行く手を阻む者は
たった一人"俺"しかいないではないか
世界など取るに足らぬ
超えていく壁はやはり"俺"だけ
心よ　心

何をそんなに焦るのだ?
お前まで焦っては
俺に心の持ちようがないではないか?

新鮮味

音楽が魂に響き
俺は目を閉じた
世界はこんなにも美しい
・・・おそらく、それを超越しようとする者には
今、夕方の空を一羽のカラスが駆けていく
それはどんな絵画にも増して
新鮮味があった

四月の朝は

何もすることのない四月の朝
何も考える必要のない四月の朝
僕の四月の朝は
こんな朝ばかり
五月になっても何も変わらない・・・
それは知っている
僕は生きていないのだから

死ぬ時

ニュースになれば
生も死も尊ばれる
どんな生も死も
それが現実である限り誰も見向きもしない
サリン事件の時、人は
倒れている人を横目に素通りしたそうだ
それはそうだろう　僕だってそうするからだ
だが、僕はーーー
家に帰ってニュースを見て、憤ったりはしない
僕も死ぬ時は
絶対に独りぼっちだからだ

魂の所在

朝、
魂はどこにあるのか?
コーヒーを入れ、それを飲み
憂鬱そうに空を見上げる僕の中には
それは・・・ない
今しがた明けの空を通っていったあの鳥達の中に
僕の魂も隠されているのだろうか?